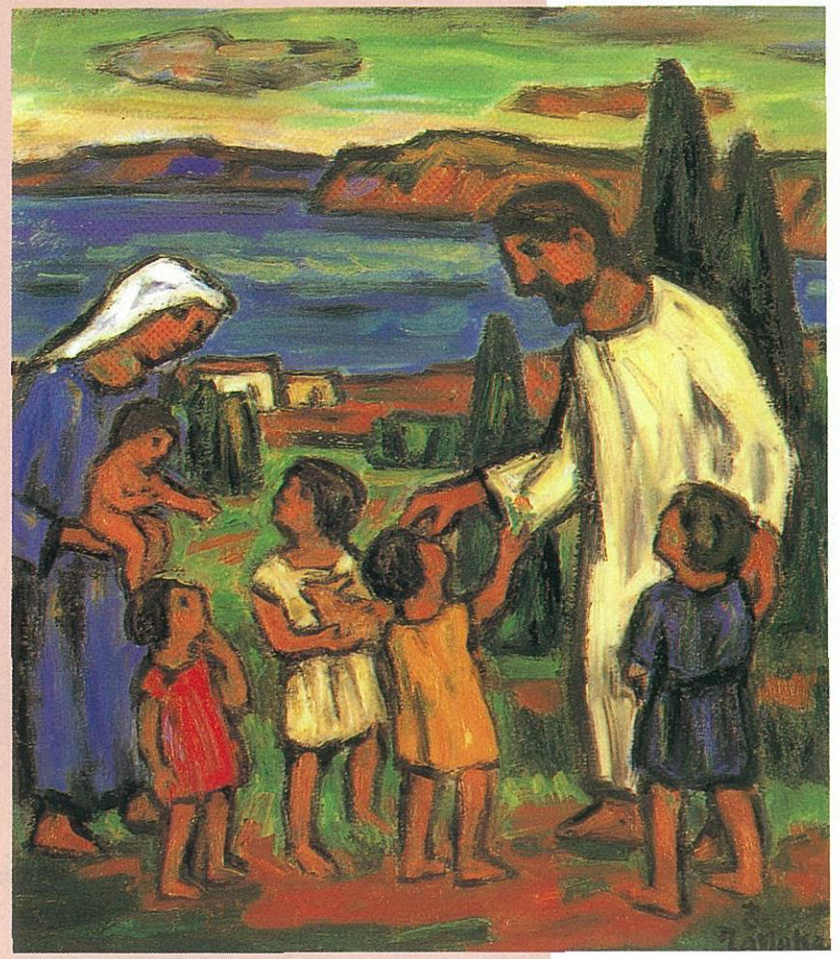
敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌

KEIWA COLLEGE REPORT

第6号
〈DECEMBER 1994〉
発行/敬和学園大学広報委員会



CLOSE UP
新しい外国語教育システムへ

特集 SPECIAL REPORT 海外レポート
夏季 短期留学を終えて

就職相談室から／就職活動体験談

開学以来恒例になりました公開講座が、今年も10月７日から８回連続で開講されています。

今年の主題は「現代の国際社会」とし、国際文化学科と教職課程を担当する教授陣が講演しております。

写真は、第一日目に初めての試みとして、パネル・ディスカッションを行った様子です。それぞれの研究分野を通して国際情勢について熱心な討論を行いました。

もくじ

新しい外国語教育システムへ…… 1
夏季短期留学を終えて…… 4
就職相談室から…… 6
ボランティア指導室より…… 7
特集 海外レポート…… 8
チャペル・アッセンブリー・アワー報告……10
学長室だより……11
ゼミ紹介……11
高橋 勝先生を偲んで……12

新しい外国語教育システムへ

教授　松崎洋子

――一九九一年七月に文部省から大学設置基準の大綱化が発表になりました。その中で、今までの基準を大きく変更したものとして、一般教育科目と専門教育科目との枠をなくすことにより、各大学独自の特色あるカリキュラムを編成することができるようになったことと、常に自己点検・評価を行うことにより、改善に心掛けることが上げられます。

それらを受け、本学では一九九二年度から、授業の評価を始め、学生生活全般に対するアンケート調査を開始し、本年度からは自己点検・評価委員会を組織し、改善に取り組み始めました。

本日は、自己点検・評価委員会の中にある四つの小委員会の一つである「外国語教育の体制についての自己点検・評価委員会」で委員長の重責を担っていらっしゃる松崎洋子教授に、これからの外国語教育のありかたを中心にお聞きします。

まず、先生が担当していらっしゃる小委員会は他の小委員会に先駆けて、昨年の十月から組織されていたようですが、どのような経緯がおありになったのですか。――

敬和学園大学は、開学した時から比較的ユニークな語学教育をしてきたと言えると思います。英語について申しますと、三年まで英語を必修としていること、リーディングとスピーキングに分けたカリキュラムであること、また全員が三年間ネイティブスピーカー（英語を母国語とする人）の先生から授業を受けること、他にも英語のスピーキングとドイツ語、フランス語の一年目の授業は週一回九十分という大学の通常の授業パタンを避け、四十五分授業を二回にし、学習効果を上げる努力をしてきました。

そこで、これからはこれらをさらに前進させ、もっと密度の濃い外国語教育ができないものかと言う問い掛けが北垣学長からあったわけです。

それは、一つには時代の要請であると思いますし、他方では新潟県に新しくできた大学として、今後どういう形で特色を出していくかと言うことにも無関係でなかったと思います。

――外国語教育と言うと、英語以外の外国語を含めた問題と考えていいのでしょうか。――

もちろんそうです。確かに敬和学園大学は英語に力を入れている面もありますけれど、私達委員はもっと広い視野で外国語教育に取り組むべきだと考えました。

第一のポイントとして、幾つかの外国語を同時に少しずつ学ぶよりは、どれか一つを集中的に学んだ方がより効果があるのではないかと思ったわけです。

また、全部の学生が必ずしも英語と言う言語に興味を持っているわけではないと思います。中には、ドイツ語、フランス語あるいは東南アジア系のことばに興味を持っていることも考えられるわけです。現在本学で専任の教員が担当している外国語は英語、ドイツ語、フランス語ですので、そのどれか一つに集中できるようなシステムを作ってみようというものでした。

――それでは、そのポイントについて、少し具体的にお聞かせください。――

はい。簡単に言うと、これまでは英語の他にドイツ語、フランス語のいずれかを選択しなければなりませんでしたが、改革後は英語、フランス語、ドイツ語のうち一つを選択すれば良い、もちろん自分が選択した言語以外の外国語に興味を持っている学生にも対応するために、第二外国語として選択することもできるようにしますが、外国語を一つにしぼって、それに充分な時間をかけて学習できるようなシステムができたということです。

もちろん、今日お話する新しいシステムは、一九九五年度の入学生から適用されますので、現在の一年生が卒業するまでは、現在のシステムと新しいシステムが並行することになります。

――そうすると、第一外国語・第二外国語と分けて選択することもできるし、一つの外国語だけの選択でもいいわけですか。――

そうです。それも一年で終わることもできる

し、三年あるいは四年に渡って履習してもいいことになります。

もう少し具体的に説明しますと、まず第一に、どれか一つの外国語を集中的に学べるようにする一方、それを望まない学生にまで押しつけるようなことは避けたかったのです。大学においては外国語教育だけが全てというものではありません。学生によっては、外国語は必要最小限におさえて、もっと他の教科をやりたいと言う場合もあるわけです。ですから、外国語の授業の達成目標を定めて、それを幾つかのレベルに分けることにしました。つまり、自分の専攻に関係なく、大学生としてはどうしてもこの程度の語学力を備えていてほしいというレベルをレベルⅠとしてこれを必修の単位としています。ですから、レベルⅠをクリヤーすれば、レベルⅡを履修しても良いし、履修しなくても良いことになります。そしてその学生は、他の外国語を履修しても良いし、語学以外の科目を履修することもできます。なるべく選択の幅を持たせる工夫をしました。

改革のもう一つの特色は、これは英語についてですが、学生が自分のレベルに応じた学習ができるということです。ドイツ語とフランス語は未修外国語（今まで勉強していない外国語）ですが、英語は大学入学時までに少なくとも六年間勉強しているわけですから、英語の力にはかなりの個人差があります。また、海外留学の経験がある学生は、少なくとも「話す」「聞く」ことに関してはレベルが上であるわけです。しかし、今まではこれらのことをあまり考慮にいれないで、全員が同じ段階を経て勉強することになっていました。

今回のシステムでは、入学直後に行うプレイスメントテストの結果によって、充分レベルⅠに達していると考えられる学生は、すぐにレベルⅡを履修することができます。

或いは、極端なことを言えば、レベルⅠ・Ⅱを飛び越えてレベルⅢを履修することも可能なのです。

――そうすると、先程のご説明と併せるとレベルⅠに達している学生は、それ以上英語を選択しなくて良いことになるのですか。――

そういうことになりますが、この点について単位の問題と併せて、少し説明させてください。確かに、レベルⅠに達している学生で、もう英語は勉強したくないと思う者は、英語を選択する必要はないわけですが、その分は他の科目を取ることによって、語学以外の科目でも良いのですが、その分の単位は取得しなければなりません。つまり、英語の単位は、レベルⅠ・Ⅱ・Ⅲいずれも八単位ですが、レベルⅡに進める人でもレベルⅠの八単位分は他の科目で取得してもらいます。

もう少し具体的に説明しますと、英語の八単位は、「読む」「書く」「聞く」「話す」の四つのジャンルに分けてあって、それぞれ二単位の独立した科目になっています。レベルⅠの八単位を取得後は、たとえば「話す」というジャンルに関心のある学生は、そのジャンルだけでレベルⅡ・Ⅲへと進むこともできるのです。

プレイスメントテストでは、それぞれの科目ごとにレベルの判断をしていきますので、全ての科目でレベルⅠをクリヤーすることは、語学力のある学生や海外留学の経験がある学生でも、なかなかむずかしいと言えます。また、その段階でレベルⅠに達している学生は、意欲的に上を目指してくれるものと思っています。

また、教職課程を履修する学生は、英語の力を充分付けなければならないので、レベルⅡ・Ⅲまで進まなければならないシステムになっています。

――今までもA系統とB系統に科目が分かれていたのではありませんか。――

そうなのですが、今までは、Aが「読む」で、Bが「話す」「聞く」の二科目だったのを、さらに四つに細分化をしたわけです。

つまり、外国語と一口で言っても、「読む」「書く」「話す」「聞く」と言うのは、全く違った作業になるからです。

それと、今までのAとB併せて年間四単位を二年間で勉強していたものを、細分化して、一年間に倍の八単位勉強するわけです。それだけ集中度が高くなり、効果は上がることになります。

――そうしますと、一週間での英語の授業が大幅に増えることになるのでしょうか。――

そうです。ドイツ語・フランス語を第一外国語として履修する学生も同じことです。時間数も英語とほぼ同じになります。また、これらの外国語のジャンル構成も、各ジャンルの単位も原則として英語と同じで、プレイスメントテストはありませんが、レベルⅠの八単位を終了後は、自分の興味に合わせたジャンルのみの学習も可能です。

それから、ドイツ語・フランス語についても英語同様、学生は必らず授業の一部はネイティブスピーカーから受けることになります。

――大掛かりな改革になるようですが、大変魅力的ですね。その他にもどんなことをお考えですか。――

ドイツ語・フランス語を第一外国語として履修する学生は各一クラス（それぞれ十～十五人程度）と予測していますので、初年度の英語はレベルⅠをジャンル毎に各六クラス（一クラス三十人程度）、レベルⅡは各一クラス設ける予定です。

それから、英語に関しては、改革点がまだあります。今までは、例えば同じⅠAの授業を何人かの教員が担当しておりましたので、中身も難易度もかなり違いがあったと思います。これですと次のレベルに行けるかどうかの判断をする場合、正確さに欠けることが考えられます。

そこで、新しいシステムでは同一レベルの授業には、ある程度共通した教科書を使用することにし、試験も共通の試験を行って、レベルを測っていく予定です。

また、「話す」「聞く」のジャンルに関しては、六

十分を週三回とし、半期ごとに完結するシステムとしました。「読む」「書く」の分野は同じやり方をするには、時間割上の制約もあり、継続して行うことも大切ですので、今までどおり九十分を週一回とし、一年を通じて行います。

さらに、四つのジャンルでレベルⅢに達すれば終わりではなく、その上のレベルとして、ビジネスイングリッシュとか上級ディスカッション・上級リーディング・トイフルの準備クラスと言ったような、その他様々なオプショナルを幾つか設けて、それをクリヤーした学生には、本学独自の英語集中講座修了証を発行することも検討しています。

――半期ごとに完結する方法は、確かセメスター制と言うのでしたよね。――

そうです。大学によっては、全ての科目をセメスター制としているところもありますが、本学では、既に保健体育理論、情報処理論等、一部で採用している科目もあります。今後ますますセメスター制を採用する学校が増えると思われますので、私達もとりあえず、セメスター制を一部取り入れることによってこの制度について検討を重ねたいと考えています。

――今までのお話をお聞きすると、カリキュラムの編成や教室の割り当てがかなり難しいのではないかと思うのですが。――

その辺は私達も頭を悩ませたところですが、一九九五年度と一九九六年度の時間割りのシミュレーションをしてみた結果、何とかできることがわかりました。ただし、六十分授業と九十分授業が並行して行われますので、できるだけ学生に不都合が起きないような時間割りにするよう、最大限の努力をしなければなりません。

さらに新しい試みとして、まだ第一外国語と言うわけにはいきませんが、今の三つの言語に加えて、中国語とロシア語も第二外国語として加える予定です。

また、留学生のための日本語教育の充実化を計り、外国語としての日本語をカリキュラムの中に組み入れ、国際文化学科の留学生は、日本語を第一外国語として履修することができるようになります。

――一年間にこれだけのシステムを考案されたことは、大変なご努力があったこととご拝察いたします。――

このような改革計画を何とかまとめる事が出来ましたのは、学長はじめ、英語英米文学科主任の伊藤先生、その他関係諸先生方のご協力の賜ものです。あらためて感謝申し上げます。

――さて、今までの内容とは異なりますが、企業から「敬和学園大学の卒業生は、英会話ができますよね。」と良く言われてますが、その点はいかがですか。――

そう期待されているのはありがたいような、おそろしいような複雑な気持ちです。現段階では、残念ながら本学の卒業生は誰でもこの程度は英語ができますと具体的な達成度を申し上げるまでにはいたっておりません。ただ、会話の力だけでその人の持っている語学力の全てを判断してしまうと言うのはどうなのでしょうか。

先程もお話いたしましたが、一口で英語と言っても、本学では四つのジャンルに分けて考えているとおり、色々な要素があります。「聞く」「話す」は英語の一面であることをご理解いただきたいのです。

――私は理解します。さて、これは本学が行っている公開講座での昨年の質問なのですが、六年間英語を勉強しているのに、どうして会話ができないのかと言う疑問について、先生はどうお考えになりますか。――

私も良く聞かれますが、難しい質問です。できない人のほうが恐らく圧倒的に多いのでしょうが、一方でできる人も結構いると思います。

乱暴な意見だと承知の上で申し上げますが、六年間学校で音楽の授業を受けて、ある楽器が格別上手になったりするでしょうか。

確かにアメリカなどの大学には英語教育という独立した学科があり、そこでは徹底的に英語教授法を学びますが、日本のシステムでは普通英語英米文学科の中で、英語学や英米文学を学びながら教授法も学ぶというものです。

こうした点に加えて、教える人間自身、努力して、努力して語学力を身につけても外国語であるという宿命的なハンディがあること、ネイティブスピーカーの不足もあって、「実用面」で日本の英語教育に問題がないわけではないと思います。

しかし、基礎をしっかり教えてもらったあとの応用については当人の学ぶ姿勢にも関係するのではないでしょうか。

―先生は英文科の出身だとお聞きしましたが、英語の道に進まれたきっかけは何だったのですか。

まことにミーハー的なのですが、私が育った一九五〇年代は、こんなことを言うと年がばれてしまいますが、戦争が終わって、ドッとアメリカ文化が流れ込んできたのです。特に音楽はアメリカのものばかり聞いてしまった。そして、何を歌っているのか知りたかった。これが英語に興味をもつようになった唯一のきっかけです。レコードを買って何回も聞いたり、歌詞を和訳したり…学校ではこのような英語は教えてくれませんから、習いにも行きました。

――最後に、英語を勉強する上で一番大切なもの、はっきり言ってしまえば、上達の早道は何でしょうか。――

英語だけの特別なことはありません。好奇心を持つこと、何のために上達したいのかをはっきりさせること。それとやはり努力ですね。つまらない答ですみません。

――ありがとうございました。もっと先生自身のこともお伺いしたかったのですが、お約束の時間が参りましたので、これで終わりたいと思います。先生はボランティア委員長としてもご活躍いただいております。お忙しいとは思いますが、これからも本学のためにご活躍ください ますよう祈念いたしております。――

（聞き手　長澤雄介）

夏季短期留学を終えて

◆91K057　小西克昭

私が今回のイギリスへの短期留学に参加した事には理由があった。それは今年の夏が私にとって最後の長期休暇である事と、私の卒業論文のテーマである「島国の文化」について、有名な島国であるイギリスについて、本だけではなく、自分の目で感じてきたいと思ったからである。それともう一つ、英語が苦手だと思っている自分を克服したいと思っていたからであった。

まず第一に「島国の文化」について考えると、私の論文に役立ちそうな様々な事を見たり感じたりできた。それは多分日本では感じる事の出来ない事であったと思うので、とても勉強になった。

そして第二に苦手な英語を克服するという事について考える。すると、ある意味では克服したのであるが、ある意味では克服していないのである。イギリスにいる間は、苦手な英語を克服していたのだが、日本へ帰ってきて一週間もすると、また英語が苦手になっているのである。その原因は、二つあると考えられる。一つ目は、イギリスでは英語を使わないと何もできないので、間違いをおそれずに英会話をしていた事。二つ目は、日本では英語を使う機会はなく、間違えた英語を話すと恥をかいてしまうからだ。そしてこれから私がするべき事は、英語を使う機会を見つけて英会話をする事により、日本でも苦手な英語を克服できるように努力をする事だと考えている。

イギリスにいた五週間は何を取り上げても、日本ではできない良い経験になった。この経験は、社会に出てからも、私の自信の源となり、私を支えてくれるものの一つになっていくような気がする。そしてまたこのような機会があれば、参加してより多くの経験を積んでみたい。

◆93K022　星名直子

私が滞在したオレンジシティは、アイオワ州のすみっこにある、小さな街である。自然が多く、過ごしやすい気候であったその街は、様々な経験をさせてくれた。

大学で行われた事前説明で聴いていた通り、短期留学参加者には日本人が多かった。ほかにも中国人や韓国人、メキシコ人も参加していたが、各県から集まった日本人は、約7割に及んだ。これでは英語は上達しないかもしれない、と到着当時は感じたのだが、上手になるかならないかは本人次第なのだ。私にとって、この状況は都合が良かった。同国の人が多いことで、かえってリラックスして日常生活を過ごせた。

いろいろと収穫したものがあった。とりわけ良かったのは、友人をたくさん得ることができたことだ。なかでも、偶然にも幼なじみと一緒に学ぶことが出来たことは、ノースウエスタン大学でなければ味わえなかったものである。彼女も含め、多くの仲間を思い出すと、五週間真面目に英語と聖書に取り組んだことも同時に思い出され、今でも力が沸いてくる。

一方、オレンジシティの住人はというと、道端で会っただけでも声を掛けてくれるほど温かかった。彼らの挨拶の一つ一つが、少しずつ私の心を溶かし、アメリカ人と日本人を対等に考えられるようにしてくれた。ところが、目につくのは白人系ばかりで、黒人は数える程しかいなかった。理由は様々あるだろうが、この点は私の瞳には奇異に映った。また、私たちの勉強の手伝いをしてくれた現地の学生の一人が、この街は閉鎖的であると言っていたことは興味深い。

ともかく、この五週間の生活で、寮生活を経験し、良い先生や友人ともめぐり会えた。そしてのんびりしたここの空気は、私の性にあっていた。「あー、いい所だった。」感想は、この一言につきるのである。

◆92K083　大谷直子

夏期短期留学に参加しよう、アメリカに行こう、と思った動機は、去年までに私の多くの友達が留学を経験しており、留学を経験したことがないのは、友達同士の中で私だけだったということから、今回の留学を希望した。アメリカに行ってみたかったとか、本場で英語を学んでみたかったとか、また、ホームステイをしてみたかったとかいうわけでもなく、ただみんなが行ったからという不純な動機からだった。

そんな不純な動機からの留学が、結果としては、私を大きく成長させてくれ、貴重な経験を与えてくれた。アメリカに滞在していたときは、全く気づかなかったけれども。私の考え方や見方は、アメリカに行く以前と比べ、多くの点において変ったと感じられるし、また自分の将来に対して、全くの白紙だったものまでが、少しずつ形を現してきた。

学校の授業に関しては、昨年までとは異なり、ACLPに混ざりみっちり授業を受

けた。私のクラスは文法に重点が置かれ、英文科でない私にとって、最初は忘れていたものを思い出すまでは大変だったけれども、英語の勘を思い出してからは、授業も大分らくに感じられるようになり、宿題もそれほど苦にならなくなった。そして、そのクラスで、様々な国から英語を学びに来ている人達と友達になることができ、本当にうれしく思っている。特に私が理解するまで勉強につき合ってくれた、ロシア人のアイリーンと台湾人のジャーニューには、とても感謝している。

ホストファミリーも同様、とても親切で、あらゆる面で気を使ってくれた。よその家庭で自分が生活しているということを、ほとんど感じさせられなかった。夕食にはよくご飯をたいてくれ、また週末には、ロサンゼルスに連れていってくれたり、一緒にビデオなどを見てくれたりした。また、子供達も（四才と一才）幼いながらも、私と遊んでくれたり、私の英語を理解しようとしてくれた。

今となって思えば、家でも学校でも楽しい思い出ばかりが思い出されるが、滞在しているときは、辛かったときもあった。言葉が上手く相手に、その場で伝えられないもどかしさ、また相手の言っていることを正確に理解できないもどかしさは、とても悲しいものであった。英語に対する私の今までの姿勢を、見直したいと思っている。また、機会があれば、家族と友達に会いに行きたいと思う。

◆93E058　齋藤志保

この夏、私はアメリカ・カリフォルニア州サンバナディノで開かれたAmerican Culture and Language Program（ACLP）に参加しました。この短期留学は私にとって、初めての海外旅行でもありました。期待と不安が入り混じった不思議な気持ちで日本を出発したものの、向こうに着いた途端不安な気持ちだけが次第に大きくなっていきました。

この留学期間中はホームステイという形で約一ケ月間ホストファミリーの家でお世話になりました。私を受け入れてくれたのは、若い夫婦と一ケ月前からこの家に滞在している台湾からの留学生でした。彼女は私と同じくACLPの学生ですが、九月から大学へ入学するために、私が到着した日から一週間後、アパートへ引越してしまいました。結局残り約四週間は、受け入れ先の両親と私、三人の生活となりました。

私の不安というのは主に言葉の問題でした。私のホストマザーは日本語が話せましたが、それに頼るわけにはいきません。私は英語を学びに来たのですから。出発前のオリエンテーションで、「何か一つ目標を立てると良いでしょう。」という話を聞いて、私は「とにかく何でもいいから英語を話す」という目標を立てました。この目標を持ち、生活に慣れてくる頃には、不安も少しずつ解消されて行きました。しかし、もちろん不安は完全に消えたわけではありません。自分の言いたい事が本当にその通り伝わっているかどうか、とても不安でした。また、一番伝えたい事がうまく伝えられずに、泣きそうになった事もたくさんありました。特に土日は、日本語が使えなかったので、週末はいつも不安でした。

休日には時々、ホストファミリーとおばあさんの家を訪ねました。彼女の家の庭には、ラズベリー、ポイズンベリーやミントなど沢山の植物が植えてありました。私達はラズベリーを摘み、家でラズベリーパイを作りました。アメリカの甘いお菓子は信じられない程甘いのですが、私たちが作ったパイは甘さを控えておいたので甘酸っぱく大変おいしく出来上りました。休日は、言葉で多少苦労する反面、それ以上に、こんなふうなホストファミリーとの交流や、ボーリング、ショッピングなど楽しい事も多くありました。

私の話す英語は間違いだらけで、いらいらする程ゆっくりな英語です。しかし、それでも気長に私の話に耳を傾けてくれたホストファミリーに大変感謝しています。

話は変わってACLPの話ですが、この午前のクラスで私は、アメリカの文化・英語の発音・会話の授業を通じて多くの人と話しました。クラスの半分は日本人（特に敬和の学生）でしたが他に、フランス・ハンガリー・ロシア・韓国・メキシコからも学生が集まり、国際色豊かなクラスでした。しかしながら私は休憩の間中、同じ敬和の友人とばかり話していました。この機会に、もっといろいろな国から集まった学生達と話しておけば良かったと、今頃になって後悔しています。

このクラスで私は多くの事を学びました。ここではアメリカの文化だけでなく、よその国の話も聞く事ができました。そして何よりも、英語が話せるだけで世界中の人々と話せるという、英語が話せる事の素晴らしさ、必要性を知りました。また、今回のアメリカ短期留学を通じて、世界の大きさと小ささも肌で感じたような気がします。

誰かに話さずにはいられない程、今年の夏休みは充実していました。かつてこれほどまで充実した一ケ月は過ごした事がなかったと思います。またいつか、必ずアメリカを訪れたいと思っています。

就職相談室から

本年度の就職戦線も終盤を迎え、学生たちの一喜一憂の声も静かになってきました。

今年の四年次生は、大学としても初めての舞台だったことから、不況と重なり、かなり厳しい就職活動だったと思います。大学の先生は、夏休みを利用して研究活動を行いますが、就職委員の先生方は休暇を返上して企業開拓に追われていらっしゃいました。学生諸君も、ともすると授業の時よりも真剣な眼差しで就職相談室と求人票を張り出している掲示板に行ったり来たりしていたようです。

十一月十一日現在の就職内定率は、男子七十四％、女子七十一％となっています。この数字が高いか低いかは、読者各位の受取方で違うと思います。

しかし、学内で一部始終を見ている者にとっては、「良くぞここまで……」と思うのですが、少し贔屓目でしょうか。

いずれにしても、まだ就職を希望している学生がおります。企業の方がこれをお読みになったら、就職相談室にご一報下さい。学生が読んだら、今一層の奮起を期待しております。

今回は、就職活動に成功した学生の体験を、質問形式で掲載いたします。後輩は、是非就職活動の参考にしてください。

既に三年次生の就職のために、全学を挙げての活動が始まっています。景気は上向きだとの声もありますが、採用を抑制するムードは残ると思います。学生生活の締めくくりとして、また、長い社会人人生のスタートとして、悔いのない活動を期待しています。

就職活動体験談

●質問

一、大学入学以前より将来の職業について考えていましたか。
二、大学在学中に就職のことを決定したのであれば、それはいつ頃ですか。
三、希望職種・業種・会社を決めてから、どんな研究や努力をしましたか。
四、資料請求はがきは何通位だしましたか。また、資料の請求先は希望職種・業種できめましたか。それとも、職種・業種に関係なく出しましたか。
五、資料が送られてきたらお礼の電話やはがきを出しましたか。
六、合同企業説明会には何回参加しましたか。また、会場で特に気をつけた事は何ですか。
七、企業の主催する会社セミナーには、何回くらい参加しましたか。
八、面接ではどんな点に注意しましたか。
九、資料請求から会社訪問して内定が出るまで企業からは、どんなアプローチがありましたか。
十、内定はいつ頃もらいましたか。また、内定が重複した場合はどうしましたか。
十一、内定後の企業からの連絡はどうですか。
十二、最後にこれから就職活動をする後輩にアドバイスをおねがいします。

国際文化学科／小島靖雄
●就職先　センチュリー証券(株)

一、特に将来の事を考えて大学を決定した訳ではないので、大学入学以前に就職について考えることはなかった。
二、就職について本格的に考え始めたのは、三年生の終りの一月頃だった。この頃から頻繁にダイレクトメールが送られてきたため、就職を意識しはじめた。
三、最初の頃は、特に職種・業種を決めずに興味を持った企業は片っ端から調べた。この時役に立ったのは、リクルートなどの就職情報誌だが県内企業に関して言えば、友達との情報交換だった。
四、資料請求はがきは約八十通位出したが、実際に返事がきたのは約六十通位だった。このとき、職種・業種に関係なく資料請求はがきを出した。
五、特にお礼の電話やはがきを出すことはしなかった。
六、新潟日報社主催の合同企業説明会に三回参加した。特に気をつけた事は、会場には開場一時間前には到着するようにしたことと、まず最初に訪ねる会社を決める事だった。特に後者を決めておかないと一時間以上待つことになる。
七、全部で十回くらい参加した。
八、面接では言葉使いに気をつけた。特に敬語はすぐに使えるものではないので、普段から気を付けるようにしていた。また自分の主張したい事、言いたい事は全て言うようにした。
九、こちらから会社訪問し、その後は企業側から筆記試験の連絡や面接の連絡があり、その通りに従った。
十、内内定は七月の終り頃に頂いた。書面では十月に内定を頂いた。
十一、手紙で今後のスケジュールが送られ

てきた。

十二、就職活動中は、いろんな情報が飛び交うが惑わされないように気を付ける事。新設大学をむしろプラス材料と考えて行動する事。最後に、これからの人生を決めることなので安易に決めたりせず本当にやりたいことは何か、よく自分自身に問い掛けて決めてほしい。言い方を換えれば、本当にやりたいことを自分で理解し、堂々と人に話す事ができることが、希望する企業へ就職する一番の秘訣だと思う。

国際文化学科／中沢宏江

●就職先　新発田建設(株)

一、大学入学時には、就職の事は全然考えていませんでした。

二、最終決定は「就職調査書」を出す直前でしたが、希望職種はどういうわけか二年生の頃から決まっていました。

三、希望会社がほとんど新潟だったので、県内に関する新聞の記事を読んで、会社の動きを見ていました。また一般常識の問題集を何回か解きました。

四、請求ハガキは四十三通、職種・業種関係なく出しました。

五、資料を見て気に入った会社にはお礼状を出しました。

六、九回参加しました。希望する会社には一番目に並べるよう会場内では走っていました。

七、十三回参加しました。

八、嘘を言わないように、また聞かれた事とかけはなれた答えを出さないように、解らない事は聞き直しました。場の雰囲気を見ておかしいときは会社の人と笑い、面接でなく会話ができるように心がけました。

九、企業からのアプローチは書面か電話で行われました。

十、内定はお盆の数日前にいただき、いただいた会社全てにお礼状を出しました。内定が重複した時は事情を電話と書面で伝え、お断りしました。

十一、採用内定通知書をいただきました。研修会などはまだありません。

十二、「女子の採用予定はない」という企業でも、自分が本当にやりたい仕事なら、当たって砕けろの気持ちで人事の方にお願いしてみることも必要です。ただし、一次試験に筆記がある会社はやめたほうがいいようです。面接重視の会社を選び、希望理由や自分の事を素直に話してみてください。また企業の方には失礼な事ですが、場数を踏んで試験や面接に慣れる事も大事です。

ボランティア指導室より

「四回目の施設研修を終わって」

ボランティアウィークの社会福祉施設研修は、建学の理念であるキリスト教主義の実践面の一つとして、第一学年必修で夏休み中の一週間を充てて来た活動である。何しろ、他山の石とて皆無の事例だけに、毎年二五〇人前後の学生を、教育活動の一環として動かすことに対しては、常に試行錯誤の荒波にもまれ通しであったことを痛感する。

一九九一年度、創立直後の大学から、私は相談を受ける立場にあったが、三一六名の新入学生（現四年生）全員が関わる活動とお聞きした時、これは困った、というのがほんねであった。各地のボランティアセンターが主導する学生生徒のワークキャンプ等は、多くとも六十名留まりの規模でしか実施していなかったからである。

その時私達が提案した施設見学、技術講座二本建ての方法について、技術ボランティア、及び社会福祉協議会職員をあげて、大学当局と提携したが、これは窮余の一策でしかないと、自己をさいなみつゝの苦い実践であった。

翌年からは大勢の学生による見学に難点が認められることから、小グループによる施設実習の形をとった。幸い福祉教育実践家桐生清次氏の斡旋により、下越地方三十箇施設の御理解を得てこの願いが達成され、以来この方法で今日に至っている。

活動を終わった学生のレポートには、「強制」「偽善」「迷惑」等々と、自主性や公共性を標榜するボランティア精神にもとるとの反発から硬い文字を投げ掛ける学生もいる。反面、そんな反発で不本意乍ら参加したが、何か知らない内に自分が変って来たと告白する者、或はどうしても自分が納得できない心の狭さを自省する者、活動の具体性が様々の問いかけを学生の心に波立たせている事は確かな事実である。

私が心を打たれるのは「父が入院したから」「身内が障害を持っているから」「祖父が寝たきりになっているから」等という動かせない事実に耐えている学生達の活動評価である。そして「私が年老いた時」にまで想いをはせて福祉社会を論ずる学生達がいて、あれもこれもやはり大学生なのだと頼もしく思う。

volo（will）に語源を持つボランティアには山野の実生植物を指す意味もある。一年次の活動を経て進級、卒業する本学学生はこの実生植物のように、いるだけで空気を清浄にし、知らずに他と良き関わりを保ちながら成育するジェネレーションであることを確信する。

（ボランティア主事　小川文勝）

特集

SPECIAL REPORT

海外レポート

ベトナムを尋ねて

国際文化学科助教授　西沢昭夫

河内大酒店。これは、訪越に際し、村山首相も泊ったホテルの名前であるが、どう読むかご存知だろうか。その答えは、ハノイホテル。河内＝ハノイであり、紅河（ホンハ）に抱かれるように市街が広がるところから、この名前がつけられたようである。このように、ベトナム語は、元々は中国語とは異なる言語圏から生まれたのであるが、中国の支配を受けたこともあって、中国からの漢字の借用語が多く使われていた。その結果、音読みにすると、時にわが国の発音に近いものが多くなるとのことであった。宗教も、わが国と同じく大乗仏教が主流であり、寺院の佇まいも、タイなどの仏教寺院とは異なり、わが国に近い雰囲気が漂っている。と同時に儒教の影響も色濃く残っている。

しかし、今年十一月に関西新空港から十九年ぶりに直行便が再開されると言った距離的な問題もさることながら、七〇年代のベトナム戦争反対運動を別にすれば、その後のアメリカ映画の影響もあって、ベトナムの人々についてはかなり誤ったイメージがあり、最近までは心理的にも遠い国ではなかったろうか。この数年は、ドイモイ（刷新）と呼ばれる市場経済化の試みを受け、インドシナ半島のフロンティア、新たな投資先として注目され始めている。とりわけ今年二月のアメリカの禁輸（エンバーゴ）解除後は、一段とその熱が高まりつつある。

ベトナム側でも、現在ベトナム語吹き替えの「おしん」が人気を得ており、そこに描かれた過去のまだ貧しい時代の日本の姿に自らを重ね合せ、その未来に現在の日本と同様の発展を期待する構図が見られるようである。

ベトナムは、一九四五年の独立以来、インドシナ戦争、南北分断、ベトナム戦争、南ベトナムの民族解放と統一、カンボジア侵攻、中越戦争、その間の大量のベトナム難民（ボートピープル）の国外脱出など、長期にわたる戦乱状態が続いてきた。その結果、北の紅河デルタ、南のメコンデルタという豊かな穀倉地帯をもちながら、一時は飢饉で餓死者を出すほどであったと言われている。この状態を脱するため、一九八六年に市場経済化と対外開放を試みたのであった。ドイモイである。

現在この成果が現われ始めているようである。八九年には米の国内自給を達成し、輸出国に転じた。九二年には、世界第三位の米輸出国になったと伝えられる。油田開発も活発化している。さらに、台湾、香港などのNIES諸国からの直接投資により、国内経済は成長軌道に乗りつつある。因に、直接投資残高で見れば、トップは、一六・九億ドルの台湾、二位は香港、日本は五・三億ドルで七位。注目されるのは、禁輸解除後僅か六カ月で、アメリカが一・四億ドル、一五位になっている点である（The Vietnam Business Journal, Sept/Oct, 1994）。アメリカの最近のアジアシフトが、こうした事例からも窺える。

だが、他方で市場経済化の進展に伴い、南北格差や都市と農村、またその内部における貧富の格差も拡がりつつある。これを解決するには、一定の経済成長が必要になり、先ずは成長最優先に傾きがちで、今後は公害や弱者切り捨てといったマイナス効果も生じてこざるを得まい。これは、嘗てわが国が経験したことである。

わが国の経験を踏まえ、こうした急激な経済成長に不可避なマイナス効果を幾らかでも減少させるために、どのような貢献ができるのか。民間投資やODAによる物的援助もさることながら、人材育成などソフト面での支援をどうすればよいのであろうか。またその受け皿としての大学などの受け入れ体制の強化も必要になろう。実際ベトナムの若い人達も、日本への留学を望んでいる。このような期待にどこまで応えてゆけるのか、わが国の課題は重いものがある。

◀サイゴン川から見た金融ビジネス街（ホーチミン市）

南アフリカ・ショート・ステイ

一般教育助教授　山田耕太

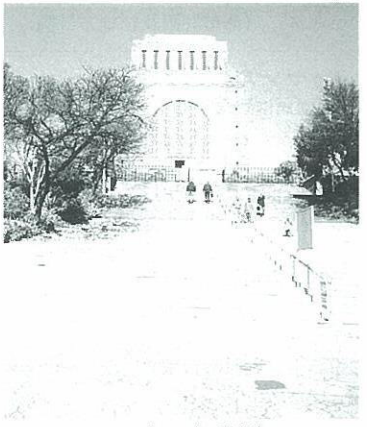
八月十五日から十八日まで南アフリカ大学で開催された神学的修辞学的批評（レトリカル・クリティシズム）第二回国際会議に出席する為、首都プレトリアに八日間滞在した。成田から香港までは四時間余り。香港からヨハネスブルクまではインド洋上をノンストップで十三時間半。地球の向こう側である。八月は冬である。冬と言ってもイギリスの四月に似た気候である。最低気温は零下、最高気温は十八度。朝夕はセーターが必要であるが、日中は屋外では半袖である。

早朝の空港に主催者のボタ教授が出迎えに来てくれていた。スウェーデン教会の代表で前ウプサラ大学教授を出迎えるまで二時間あるので、車で二十分のヨハネスブルクまで私を案内して下さった。カールトンセンターというショッピングセンターの五十階の展望台から、高層ビルが建ち並び高速道路網が巡る、経済と商業の中心都市を一望する。遠くには住宅地の間にボタ山が幾つか見える。この近代都市の地下三千メートルの所に金鉱があり、現在も採掘されている。百年前に金鉱が発見されるまで、ヨハネスブルクは荒涼とした原野だったと言う。

ヨハネスブルクとプレトリアは六十キロしか離れていない。高速道路や道路標識は全てイギリス式である。旧英連邦に来たという印象である。しかし、地名はオランダ語である。英語とアフリカーンスというオランダ語方言が公用語として用いられている。テレビ番組もほぼこの二ケ国語で放送されているが、時折バンツー語などのアフリカ部族語も入ってくる。〝ゲストハウス〟に宿泊したが、大学の建物ではなく、高級住宅の〝ベッド・アンド・ブレックファスト〟のことであった。

四年前までアパルトヘイト政策を支持していた白人教会、オランダ改革派教会に属する年配の建築家の夫婦の家に八日間お世話になった。自由主義的な大学人とは違って、黒人政権に対してアンビヴァレントな感情をもつ保守的な市民感情をも知ることになった。会議中はゲストハウスから大学まで、大学のヴァンで海外から招待された学者を拾って廻り、毎日同じコースで四人の学者と往復一時間ずつ、膝を交じえて雑談することになった。

修辞学的批評は聖書の文学批評の一つで、現代の修辞学理論をも念頭に置いて、アリストテレス、キケロ、クインティリアーヌスらのギリシャ・ローマの修辞学を用いてテキストを分析する、最先端領域の一つである。一九九〇年代に世界の幾つかの大学でプロジェクトが組まれ、研究が進められている。南アフリカ大学はそのメッカの一つである。



フォートレッカー記念碑
アパルトヘイトの象徴的建物

第二回修辞学的批評国際会議は、「修辞学と宗教」会議と称されることになった。会議には七五名が参加した。多数は南アフリカの諸大学から集まった旧約学者、新約学者、神学者であった。必然的にディスカッションは専門的な話題から南アフリカの今日的な話題にも移っていく。高度に学問的な議論の背後には、白人キリスト教と黒人キリスト教の和解をレトリックを用いて探り求める動機があるようだ。アパルトヘイト政策をやめて、南アフリカ人として誇りが持てるようになった、黒人ばかりでなく自分達も解放された、という発言が印象に残る。私も拙い英語で、キケロの修辞学的歴史叙述と使徒言行録の歴史叙述に関する論文を発表したが、鋭く厳しい指摘と温く好意的な励ましの言葉との両方を受けることができ、有益であり感謝であった。

会議では合計二六の論文が読まれたが、南アフリカ以外の国から招待されて発表したのは、アメリカ六名、オランダ、ベルギー、ノルウェー、フィンランド、日本の各一名であった。フィンランドの若い学者と私は、ホームステイ先も同じであり、同じ四人の子持ちでもあり仲良くなったが、世界的に著名な学者やそれぞれの国を代表する学者の中で揉まれて育てられた感じがした。会議で読まれた論文は、イギリスのシェフィールド・アカデミック・プレスから来年出版される。

南アフリカは東欧やソ連のように旧体制が崩壊し、新体制を築き上げようとしている。社会はまだ目に見える形では劇的な変化を遂げていないが、意識は明確に変化した。精神的鎖国を続けてきた白人社会は、黒人を隔離するのではなく共生し、開国しようとしている。マンデラ大統領の就任百日目演説は、日欧米からの経済的支援ではなく、国内からの支援の重要性を訴えるものであった。

チャペル・アッセンブリー・アワー報告

第１回 ４月15日	チャペル・アッセンブリー・アワー 「良い木は良い実を結ぶ」　北垣宗治学長 マタイによる福音書７章17～20節
第２回 ４月22日	チャペル・アワー 「逆転の宗教」　延原時行宗教主任 ルカによる福音書18章10～14節 アッセンブリー・アワー 「学生生活について」　久島公夫学生主任
第３回 ５月６日	チャペル・アッセンブリー・アワー 「希望のうた」　十日町教会　松井愛美牧師 コロサイの信徒への手紙３章12～17節
第４回 ５月13日	チャペル・アワー 「時と人生」　延原時行宗教主任 コリントの信徒への手紙二　３章１～11節 アッセンブリー・アワー 「ＧＯ　ＡＢＲＯＡＤ」　学生　飯沼正志 「自分らしく生きるために」 学生　伊藤宏之
第５回 ５月20日	チャペル・アワー 「惜しみなく愛は与える」　山田耕太助教授 コリントの信徒への手紙二　９章13節 アッセンブリー・アワー 「敬和学園大学の完成年度とボランティア」 小川文勝ボランティア主事
第６回 ５月27日	チャペル・アッセンブリー・アワー 「勝海舟とキリスト教」 竹中正夫同志社大学教授
第７回 ６月３日	チャペル・アワー 「ジャクリーン・ケネディ・オナシス」 延原時行宗教主任 エフェソの信徒への手紙５章21～33節 アッセンブリー・アワー 「私の歩いた道」　長谷川榮作聖籠町長
第８回 ６月10日	チャペル・アワー 「愛は死のように強い」　山田耕太助教授 雅歌６章７、８節 アッセンブリ・アワー 「いまなぜ国際文化か」　西澤昭夫助教授
第９回 ６月17日	チャペル・アワー 「自己受容」　延原時行教授 コリントの信徒への手紙一　６章19、20節 アッセンブリー・アワー 「本年度ボランティアウィークの在り方」 小川文勝ボランティア主事
第10回 ６月24日	チャペル・アワー 「人生の目的」　延原時行宗教主任 マルコによる福音書16章１～８節 アッセンブリー・アワー 「“旧城下町新発田”とそのアンデンティティ」 （都市計画・空間からの視点を重視して） 渡辺幸二郎新発田建設（株）代表取締役社長 （都市計画及び地方計画）
第11回 ７月１日	チャペル・アッセンブリー・アワー 「幻がなければ民は堕落する」 北垣宗治学長 箴言29章18節
第12回 ９月30日	チャペル・アッセンブリー・アワー 「かかわりあうこと／まきこまれること」 北垣宗治学長 ルカによる福音書10章25～37節
第13回 10月７日	チャペル・アワー 「告白の系譜」　延原時行宗教主任 詩編32編 アッセンブリー・アワー 「夏期短期留学に参加して」 学生　小西克明、星名直子、大谷直子、斉藤志保
第14回 10月14日	チャペル・アッセンブリー・アワー 「愛と自由に生きる」伊藤義清　行人坂教会牧師 ガラテヤの信徒への手紙５章13～16節Ａ
第15回 10月28日	チャペル・アッセンブリー・アワー “Let's Sing”「歌とメッセージのプレゼント」 アメリカン・シンガーズ
第16回 11月４日	チャペル・アッセンブリー・アワー 「南アフリカから」　山田耕太助教授 使徒言行録20章35節

学長室だより

第一期生の卒業式は明年三月二十一日（火）、新発田市民文化会館で挙行することになりました。何人の卒業生が巣立っていくのでしょうか。心配と楽しみがこもごも沸き起こります。卒業予定の諸君はいま卒業論文と真剣に取り組んでいます。この号の別の頁に報告されているように、就職希望者の七十二パーセントの就職が内定しましたが、残りの二十八希望パーセントの諸君は、最後の就職運動をすると同時に卒業論文を書かねばならず、その苦労が思いやられます。しかし、最後まであきらめてはなりません。「残り物に福あり」というではありませんか。

本年の大学祭は、さすがに四年目ともなると、これまでのうちで最高の盛り上がりを見せたといえます。奥泉光氏の講演は非常にすばらしい内容だったそうですが、残念ながら私はその講演と同じ時間に、学内の別の場所で、敬和学園高等学校のPTAの皆さんに講演していました。いくつかの公開授業、いくつかのゼミやサークルによる展示も興味を引きました。片桐教授のゼミでは卒業論文にヘレン・ケラーの来日を研究している学生があるそうで、古い新潟日報にのったヘレン・ケラーの新潟訪問の記事の拡大コピーが展示され、私も大阪で講演したときのケラー女史ご本人の声をテープできかせてもらいました。

十一月十四日に開かれた新潟県の学長・知事懇談会の席上私は、近ごろ韓国側の発言から旗色の悪くなった「環日本海」という言葉について、平山知事の意見を質しました。これに対し、知事は、韓国からそういう意見が出たからといって、すぐに「東海」に改めるわけにはいかないので、しばらく推移を静観し、適当な対策を考えていきたい、ということでした。韓国では日本で行なわれる研究会や協議会に「環日本」という言葉が使われていると出席しない、ということを決めておられるようです。敬和のカリキュラムにも「環日本文化研究」があり、どのような呼称が適当であるかを議論しています。国際交流の難しい一面です。

（北垣宗治）

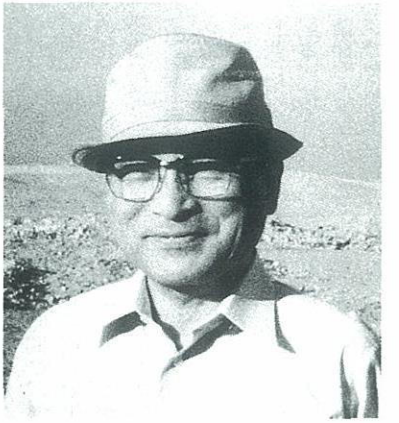
中央がバダムオチルイン・ドルジンツェレン駐日モンゴル大使

ゼミ紹介

教授　孫野義夫

旧制の大学、それも文学部のせいか、大学生のころはゼミという名のものはなかった。事務部が充実していて、研究、教育にだけ学者先生が責任をもっていればよかったからではない。事務部の実力ということになると敬和学園大学は、誉められていい。前任の大学では医学部のように専門職につくための学部であったから、就職の相談にのる必要はなかった。ひたすら専門能力が育ってもらえればと決めた。35年程前のことになる。敬和学園大学では最初の年になんと5名、次の年には14名もの学生が私のゼミに登録された。冷やかしもあって、ゼミを強く意識する数名の学生が、私の研究室に打診にはきていた。私のゼミでは今のところ方針は立てていない、学生がそろってから考えたいとだけ話した。見方によっては、無責任な話ではある。

ゼミの質は、学生たちに負うところが大きい。また、そこがこちらの楽しみでもある。うちのゼミにかぎらず、いまの卒業生をもたない一期生たちは、十分に戸惑ったはずである。ゼミの運営については、いちおう口出しはひかえた。必要は発明の母だという陳腐な格言は、いきていた。進路決定の期限が拍車をかけた。学生の就職にのりだしたのは、私が就職委員に要請されたからではない。就職運動の過程でいろんな話を聞いてもらった。専門の知識以上にかれらは真剣に、人生の先輩の経験に、耳をかしてくれた。すでに、就職運動は終わった。卒業研究の、いま、まっただ中にかれらはいる。直接に就職につながらなくとも、広く学問というものが、なにか、射程のあるものだという風合いに気がついてもらえたらとおもう。ときどきカンシャク性高血圧症候群になる。たしなめた学生を、なつかしく、永く記憶にとどめるのも、ゼミの効用の一つか。（1994、11／1）



前理事長 高橋 勝牧師を天上に送る

十日町教会牧師
学校法人敬和学園理事
松井愛美

高橋勝牧師は地上での使命を果たされ、東京・虎ノ門病院において一九九四年八月二十七日、天に召された。享年七十一歳。今にして思えば、高橋牧師は癌と知りつつ、大学設立委員長として、理事長として重責を担い、大学設立のため東奔西走、尽くされた。大学設立申請のタイムリミットが組まれた中で苦悩された。そのことで死期を早めたのではないかと恐れる。高橋牧師は任なかばで大学設立の責任を降り、後事を後宮俊夫牧師に託した。

高橋牧師は番町教会の牧会と癌との戦いの中で、大学開学の日を静かに見守った。私は理事長の責任と職責がそばで見て感ずるより遙かに重いものだということを、大学設立の事業を通して思い知らされた。一つの教会を預かる牧師としてその職責をはたして行くだけでも任の重い仕事である。牧師は教会の信徒の生死に関わり、生きて行く道を説き、福音を宣べ伝え、自らキリストの前に謙虚にされ、学び、祈りつつ歩むことを求められる。そして牧師の仕事は激務である。大学設立の責任を果たすと言うことはそれに加えて、もう一つの大きな責任を持つことを意味している。容易なことではない。

大学設立に関して言えば、文部省の大学設置基準はたいへん高いものであった。教員資格についてしかり、財務審査についてしかり。設置基準が高いということは内容のある大学が求められることを意味しているのだから、当然な事ではある。

敬和学園は新潟に福音主義信仰に立つ高等学校をとの熱い祈りに支えられて、日本基督教団立高等学校として、今から二十七年前の一九六七年十一月三十日、知事認可が下り、設立された学校である。新潟教会在任中の高橋牧師は設立代表者となり、大きな役割を果たした。高橋牧師の半生は敬和学園設立の準備の段階から数えて、敬和学園との責任ある関わりを持った人生であったと言える。

高橋牧師は一九四九年、私が同志社大学に入学した年に、わたしと入れ代わって卒業した。初めてお会いしたのは一九五九年の夏、軽井沢であった。先生はアンドーバーニュートン神学校とシカゴ大学を卒業して軽井沢教会に赴任したばかりであった。スクーターに乗って伝道する高橋牧師の姿はまばゆいばかりに輝いていた。高橋牧師は一九六一年一月新潟教会から招へいを受け、軽井沢教会を辞し、新潟教会に赴任した。

高橋牧師がそもそも献身し、牧師となった動機は何であったのだろうか。高橋勝牧師は一九二三年二月十四日宮崎県東那珂郡飫肥町板敷八二八番地に篤信のキリスト者の家庭に長男として生まれた。県立飫肥中学卒後、一九四一年四月、逓信官吏練習所技術科甲に入学、稲垣守臣牧師の牧会する麻布教会に出席。翌年夏、稲垣牧師に連れられ北海道、樺太の夏期伝道に参加した。後、これが献身の遠因となる。一九四四年四月二十日、熊本に入営、幹部候補生となり、広島に移る。八月四日第一線を志願、広島の本営から転属、郊外の仁保に移り、六日、広島市が眼下に見下ろせる仁保山の通信所に入ったとき、午前八時十五分原爆の衝撃を受けた。たった二日間の転属が生死を分けたのである。戦争が終わった。価値観が転倒する中で、神の召命を受けた。稲垣牧師は宮崎に赴き、両親を説いた。かくて、高橋勝牧師は一九四六年五月、同志社大学神学部に入学したのである。それからの高橋牧師はひたすら主の道を歩み、与えられた使命に命を捧げられたのである。

高橋　勝先生を偲んで

「希望、自由、平和」
恩師　高橋勝牧師

教務課長補佐
田邊昌邦

高橋先生は、死の床にあっても、なお主と語り、笑顔でおられた。いつも来られる人には笑顔で語る人であられ、また言葉を失っても主の平安を示されていた。

冒頭の「希望、自由、平和」という言葉は高橋先生の最も好きな言葉である。先生が「イエスの名」という著書を出版され、その本をいただいた時に、先生にひとこと書いて下さいとお願いした際の言葉である。その時、先生は恥ずかしそうに「僕は贈る本にサインや送る言葉を書くのは苦手なんだよ。」でも、そこを何とかお願いしたところ、ちょっとうれしそうにされながら書いていただいた言葉である。これをお書きになる先生の姿には、恥ずかしさの反面、ご自分の今まで伝道して来られた時の流れの背後にいつも神様がおられ、この「希望、自由、平和」を探求し続けている自信が満ちあふれていた。その時、希望―神はいつどんな時でも希望の光である。自由―神とともにいることによって何物からも自由である。平和―神を信じ、人を信じることで、恐れ、不安が消え失せ、社会が平和となる。と、私は理解した。

高橋先生は戦時中、広島にて陸軍の兵士として訓練を受けておられた時に、原子爆弾の閃光を浴びて、被爆者となったのである。これを機に先生は神と出会われ、信仰の道に進まれた。その時、平和がいかに大切なことかを感じられたそうだ。この「希望、自由、平和」のことばの中に、先生の伝道のあり方があると思う。

先生はいつも私達に希望と夢を与えて下さった。「主はわたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによってわたしたちは愛ということを知った。」（ヨハネ第一ノ三ノ十六）。先生はかく説教された。「御子はこの地上に下り、御自身を十字架にかけ、甦って、救いの業を成就されたのであった。一人の死の犠牲によって生命を与えられた喜びは言い知れぬ深い感銘を残すものである。十字架の主の死と復活を心に刻まれて始めてクリスマスを喜ぶのである。この福音信仰を根底にしてクリスマスを祝うものは生涯、主の業のために用いられて志を変えることはない。また、主の恵みと祝福から洩れることはないと思う。」（一九八四、十二、二十三、番町教会にて）。

このことばの中には、主イエスの十字架の血しおによる罪の贖い、いやしという本当の意味の福音がある。先生はそれを真にあかす人であられた。そして、夢を。

私は先生を師とも父とも思い、いろんなことを学ばせていただいた。落ち込んでいる時もすべて受け入れていただいた。先生と話しをするだけで、希望を持って、元気が出てくる不思議な方だった。神がともにおられた。

先生が天に召される数日前にお会いした時は元気なお顔で眠っておられた。でも、お会いするごとに、その日の近いことを感じた。そして、一九九四年八月二七日夜、電話があった。すぐにお顔を拝見したく東京へ。でも、いつもと同じお顔であったが、神の御元に完全にいだかれていた。そこには、いつも手をぱちぱちと打ちながら、すたすたと歩いて来られる先生の姿はなかった。私の心の中に「希望」という夢を与えて下さる方が亡くなったという、何かポカンと穴があいたような気がしたのは私だけだろうか。

先生を炎の中に付した時、空が一転して曇り、雷鳴が轟き、怒涛の如くに大粒の雨が降り注いだ。一瞬、聖書に書かれているイエスの死の場面が私の頭を横切った。真実に恩師高橋勝牧師は、その身が焼かれる時も神とともにおられた方だと感じた。私に残ったものは、ただ夢を語る師を失った思いと、完全に神の御元に送ったという思いであった。二人目の父を失った思いである。

いま、父なる神の御元にある二人の父を想って、恩師高橋勝先生の大いなる足跡に改めて感謝し、思いを馳せる。

FROM CAMPUS

キャンパス日誌

8月

2日　桜美林学園16名視察
17日　事務職員及び図書館職員採用試験(一次)15名受験
23日　伊勢崎高等学校教員視察
27日　新発田祭り民踊流し参加 約50名

8/27 新発田祭り民踊流し

9月

2日　高橋勝前理事長告別式
5日　事務職員採用試験(二次) 4名受験
8日　山形県企画調整部職員2名視察
1994年度　関東地区私立大学教職課程
研究連絡協議会(第3回研究会)

9/8 1994年度関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会(第3回研究会)

12日　ボランティア・ウィーク(17日まで)
19日　図書館職員採用試験(二次) 1名受験
21日　第43回 教授会
24日　敬和ふれあいバラエティー

ボランティア・ウィーク
(9月・二の丸)

10/8～10 HOT WAVE NIIGATA '94
チア・リーダー部 式典参加

10月

3日　日本大学山形高等学校教員2名視察
5日　第44回 教授会
7日　公開講座
第1回「現代の国際社会」パネル・ディスカッション
司会　斎藤祐介講師
パネリスト　淺野幸穂教授、塩屋保助教授、
西澤昭夫助教授

9日　リトリート(10日まで)
14日　公開講座
第2回「東アジア経済圏の形成と日本の企業」
講師　西澤昭夫助教授
北垣学長　日本基督教団新潟地区壮年会で講演
17日　敬和学園大学後援会役員会
18日　明誠高等学校教員2名視察
19日　富山北部高等学校教員2名視察
21日　「敬和祭」(23日まで)

学生茶会
公開講座・講師 奥泉光先生
英語カラオケコンテスト
出店

10/21～23 第4回 敬和祭

北垣学長　下越地区小学校長研究集会で講演
公開講座 第3回「アジアの戦後処理を考える」
講師　淺野幸穂 教授
22日　日本ホイットマン協会　第32回大会
敬和学園高等学校PTA校舎見学　学長講演
公開講演会「虚構と現実と小説」講師　奥泉光先生
24日　学校法人敬和学園　常任理事会・理事会
27日　アングロ・コンティネンタル社
マーケティング担当重役 ロビン・サンダース氏来学
日本育英会 職員2名 説明のため来学
28日　公開講座 第4回「国際金融に反映する国際社会」
講師　大海宏教授
29日　BSNラジオ　校内でクイズ番組実況

11月

2日　第45回教授会
4日　推薦入試願書受付開始(15日まで)
公開講座
第5回「国際性と心理学」 講師　益谷真講師

K. EIWA COLLEGE REPORT / DECEMBER 1994
発行所/敬和学園大学 〒957 新発田市大字富塚1270番地 TEL 0254-26-3636(代)